

いまこそリンカーンの演説の意義を活かしたい

千葉大学大学院工学研究科都市環境システムコース准教授
一般社団法人 光楓座 代表理事
佐藤 建吉

リンカーンのゲティスバーグ演説は、“government of the people, by the people, for the people”というフレーズが有名であり、「人民の、人民による、人民のための政治」と訳出されている。1863年11月19日に、南北戦争の最大の激戦地、ペンシルベニア州ゲティスバーグでの戦没者のための国立墓地献納式典で行われた演説の一説である。

戦後の日本国憲法の前文にも盛り込まれている。「人民の、人民による、人民のための政治」という訳出については、英語学や政治学などの立場からいろいろな解釈や議論がなされてきた。その要点は、“government”の要点は、“government”が「政治なのか政府なのか」、また、“of”の用法が「主格か所有格か目的格か」などである。この議論に、野村忠史氏が、明確な回答を行った。「government of the people」の解釈について「英語と英語教育の眺望」(2010)という論文である。

野村氏は、英語学者としての解釈、先行訳や先行資料の比較研究、そして外国人学者との議論、さらにリンカーンの草稿

原稿の精査などを通して、“government”は政治が適当で、“of”は由来を意味する用法が適当で、「人民の、人民による、人民のための政治」は発音とあやふし結論付けている。このフレーズは、民主主義の精神で達成されるべき事案に対する合言葉として適用することができる。

2014年の5月から9月まで筆者らは、所属する大学や一般社団法人ほか三つの団体とともに、「市民の、市民による、市民のためのエネルギー講座」と名づけた全10回の連続講演会を千葉大学で開催した。これでは「人民を「市民」に替えて適用した。現代市民社会の主役である市民ひとりひとりが、現代社会の重要案件である「エネルギー」について、自らの意思に基づいて関与できる持続可能なエネルギー社会や利用方法について学習する機会を提供することを、この講演会の目的とした。

Today, I would like to speak here that energy of the common people, by the common people, for the common people shall have the sustainable society on the earth.

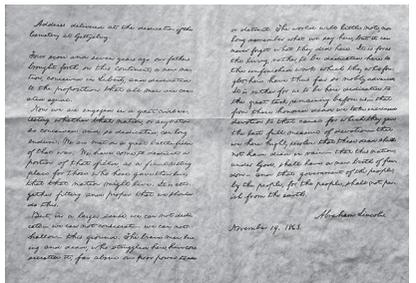
(今日、私はここで次のことを申し上げたい。一般市民の、一般市民による、一般市民のためのエネルギーが地上に持続可能な社会をもたらすものである。)

キックオフのメインの講座は、市民のエネルギー論者の北澤宏一氏に「未来のエネルギーのために！」と題して講演していただいた。その開催予告や開催報告は、本紙も紹介した。この連続講座の内容は、原子力発電の是非や再生可能エネルギーの代替可能性、来るべき水素エネルギーの利便、そしてそうした道程への市民や自治体の取り組みの実例や提示、さらに海外事例などのテーマを設定し、市民参加のメニューを組み立てた。

ができた。だが、次のような不満足の状態も残されている。まず、この連続講座は、土曜日の午後1時に開催したが、参加者の多くがシルバー世代の60代前後で、未来を担うべき若者世代は少なかった。つぎに、この講座で学び会得した望ましいエネルギー利用の方向性と現実のエネルギー政策には、なお乖離が存在している。さらに残念なことに、このギャップを縮め問題解決する有力な人物と期待された北澤氏が本講座が終了した直後の9月26日に急逝されたのであった。

ゲティスバーグ演説を拠り所として、「市民の、市民による、市民のためのエネルギー」という表現は、エネルギーデモクラシーのモットーとして有用であると思われる。そうした意味において、福島真飯館村の「村民の、村民による、村民のための発電会社」※は、大いに支援したい取り組みである。

※飯館村の発電会社「飯館電力」については本紙第23号(4月6日発行)最終面参照



わずか263語のGettysburg Address (1863年11月19日)

この初回のキックオフ講座では、主催者を代表して筆者が、シルクハットにモーニングコートの扮装でリンカーンを模し、ゲティスバーグ演説の全文を英語と日本語で読み解き開会したが、特にその結びに次の一文を